

発刊にあたり

同窓会長 田中仁純

八十周年記念事業の運営委員会が組織された頃であった。同期の友人が古い新聞切り抜きを持って訪れた。それは昭和六十一年九月二十七日付の北羽新報社の文化欄の記事であった。投稿者は八竜町・一期生の畠山哲也氏で、「能高同窓会に望む——創立六十周年を回顧して」と題した記事である。その前年の六十周年記念式典に参列した感想と今後の同窓会運営についての提言が主な内容であった。そのなかの「母校賛歌」の部分を抜き出してみると、

「母校賛歌はかつて毎日新聞社が企画し、県内の高校からピックアップして連載したもので、能代高校の巻は四十回も連載された。記録資料不足の母校の校史を裏付けるかけがえのない生きた実証資料でもあろう。もちろん完璧というものではないにしても、連載された各校とも完結後、刊行のケースは違っても自校分を単行本として希望者の手に渡されている。ひとり能高のみ実施していないことを遺憾に思い、かつて私は同窓会の総会で、何らかの方法で実現することを付帯条件として役員会に一任したことを思い出す。継続して協議すべきことも不問に付されていると聞き、頼りなさを禁じ得ない」ときびしい忠告がなされている。

あれから約二十年の歳月が流れ、母校は八十周年を迎えようとしているが、畠山先輩はじめ思いを同じくする同窓生の希望が未だ実っていないことに、当時から役員の前で名前を連ねていた者として忸怩たる思いであった。思い出に通ずる記憶は歳月と共に霞がかり、やがてそのなかに埋没するものである。

「母校賛歌」は樽子山時代の青春像が生々と描写されており、いわゆる「実証」そのものである。いまは校舎もない樽子山の残映が彷彿として浮かびあがるものと思われる。

また、樽子山時代を知らない同窓生諸君も、窓から眺める景色は違っても、同窓の絆で結ばれる先輩の学窓生活にふれる貴重な冊子になるものと確信する。以上のことを考慮して、今において機会はないと思いついた次第である。

これを契機としてさらに母校愛が醸成され能代高校の益々の発展に資することを期待したいものである。

平成十七年一月二十八日